

Collection
de la
Littérature Universelle



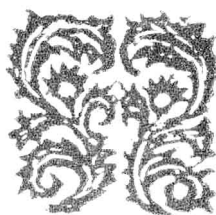
ジャン・バロワ 弟子

マルタン・デュ・ガール ブールジェ

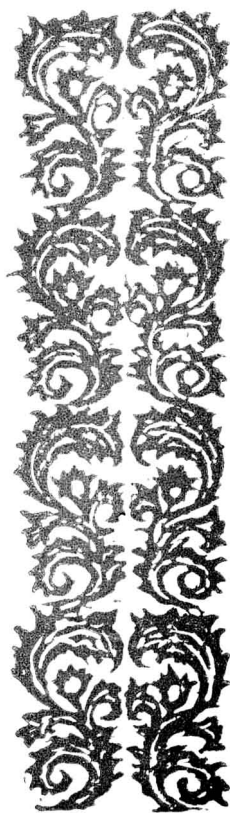
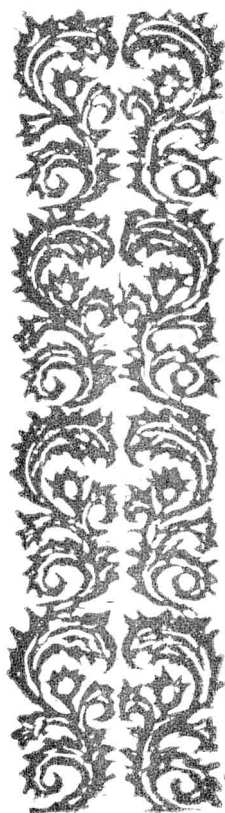
山内義雄 譯

世界
文學
全集

19



河出書房



世界文学全集 (第二期) 19

マルタン・デュ・ガール ジャン・パロワ
ポール・ブールジェ 弟 子

特抄本文紙：神崎製紙株式会社
同 納入：中井商店
表紙クロース：日本クロス工業株式会社
同 納入：小島洋紙店

© 1956

昭和三十一年十二月十日 印刷
昭和三十一年十二月十五日 発行

定価 三百八拾五円
地方定価 三百九拾円

訳者 山内義雄
やまのうち よしお

発行者 河出孝雄
東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者 草刈親雄
東京都新宿区市ケ谷台町一

発行所 河出書房
東京都千代田区神田小川町三ノ八
株式会社

電話 東京(29)三七二一―九番
振替口座 東京一〇八〇二

印刷・製本：中央製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替え致します

一 シヤベ、結婚後二年、シハツル司

鎖

三 祭の手紙

三 シヤベの婚約に関するシハツル司

二 シヤベの死に於て、シヤベ、シハツル

一 シヤベ、シハツルからシハツル司の報に接す

指環

三 祭の手紙

三 シヤベの二年の司祭の対話

二 シヤベの二年の司祭の對話

シヤベ、ハプロワ(シロ・ハ・ヤ・シカ・チ・ユ・ガール)

一 解説

目次

一 シヤベの學生活に於いてのシヤベ

二 シヤベの學生活に於いてのシヤベ

象徴的要素

三 子供としてのシヤベに於けるシヤベ

二 シヤベの死に於けるシヤベ

一 シヤベの死に於けるシヤベ

二 シヤベの死に於けるシヤベ

三 シヤベの死に於けるシヤベ

四 シヤベの死に於けるシヤベ

五 シヤベの死に於けるシヤベ

六 シヤベの死に於けるシヤベ

七 シヤベの死に於けるシヤベ

八 シヤベの死に於けるシヤベ

九 シヤベの死に於けるシヤベ

一〇 シヤベの死に於けるシヤベ

一一 シヤベの死に於けるシヤベ

一二 シヤベの死に於けるシヤベ

一三 シヤベの死に於けるシヤベ

一四 シヤベの死に於けるシヤベ

一五 シヤベの死に於けるシヤベ

一六 シヤベの死に於けるシヤベ

一七 シヤベの死に於けるシヤベ

一八 シヤベの死に於けるシヤベ

祭にたいし、無宗教的な気持の

発展について述べること……………四四

二 ノートル・ダム・デ・ヴィクト

ワールでの九日祈禱……………四八

三 女に関するジャンの感想……………五三

四 ジョジュ司祭との散歩。結婚と信

仰……………五三

解 消

一 ヴァンセスラス高等学校での

「生体変形論」の講義……………六〇

二 自由思想会議についてセシルと

ジャンとの争論……………六三

三 ジャンの辞職をめぐっての、バク

ラン夫人、セシル、ジャン間

の争論……………六五

四 ロンドンでの会議「信仰の全面的

動搖の原因」……………六九

五 女子誕生ののち、ジャン、ふたた

びビュイに姿をあらわすこと……………七二

六 セシルとジャンとの最後の口論……………七三

七 解消確認の公証人の手紙……………七五

第 二 部

《種蒔く人》

一 ジャン・パロワ、ブレイユ・ゾエ

ゲールにあて、絶対自由の身に

なったことを知らせること……………七九

二 《種蒔く人》創刊のため、パロワ

の友人たちの会合……………七九

三 《種蒔く人》創刊号発行ののちバ

ロワ、リュスを訪問すること……………九〇

嵐の先づれ

一 《事件》の最初の兆候……………九六

二 ウォーズマス、パロワに、ベルナ

ール・ラザールの弁論を読んで

きかせる……………九八

三 リュス、パロワに、《種蒔く人》に

宣言をのせたい意向をジャンに

話す……………一二〇

嵐

一 ゴラ裁判に先だち、《種蒔く人》社

の集会。窓下に暴徒の群……………一五

ニ ジラ裁判第二回公判……………一九

三 アンリー大佐の自殺……………二三

四 レンヌ軍法会議を中心として。ド

イツの抗議……………一三七

五 レンヌより帰る……………一四七

六 一九〇〇年の博覧会。リュス▲事

件▼を弔うの言葉を述べること……………一五〇

風

一 バロワの生活についてのインター

ヴュー……………一五四

ニ トロカデロでの講演『無信仰の将

来』……………一五五

三 椿事。危うく死をのがれること。

遺言書……………一六三

第三部

ひび

一 バロワ、別居後数年、ジョジエ司

祭の訪問をうく……………一六九

ニ ソラの遺骨をパンテオンへ……………一七三

子

一 マリー、父の許に来ることを申し

出る……………一七七

ニ マリー、パリに来る……………一七九

三 バロワ、娘の信仰を知る……………一八二

四 マリーの天職について、リュスへ

の手紙……………一八七

五 パ克蘭夫人の死。バロワ、マリ

ーをビュイに伴い帰る……………一八八

六 バロワ、肋膜炎を病む……………一九一

危機の年

一 バロワと若き自由思想家との意見

対立。カトリック青年に関して

のバロワのアンケート……………一九四

ニ マリー、修練女となるに先だち、

父に別れを告げにくる……………二〇六

三 バロワ、▲種蒔く人▼の主筆辞任

の旨をリュスに言いおくる……………二〇八

四 マリーの着衣式……………二二三

薄暮

- 一 ふたたびビュイに住むこととなつたバロワ、レヴィー司祭の訪問をうく……………二五
- ニ レヴィー司祭の日記。バロワの信……………二五

弟子（プールジエ）

- 一人の青年に寄す……………二二七
- 一 ある現代の哲学者……………二四一
- ニ グレルー事件……………二五三
- 三 ひたむきな苦しみ……………二六二
- 四 現代における一青年の告白……………二七三
- Ⅰ 遺伝……………二七五
- Ⅱ わたしの思想環境……………二八六
- Ⅲ 移植……………二九八
- Ⅳ 最初の危機……………三一四
- Ⅴ 懊悩……………三六八
- Ⅵ アンドレ伯……………三七八
- 年譜……………三八九
- 仰の發展……………二一八
- 三 バロワの回心……………二二三
- 四 リュス、最後にビュイを訪れる……………二二五
- 五 リュスの死を報ずるウォーズマスの手紙……………二二九
- 六 バロワの死……………二三一
- Ⅴ 次の危機……………三三八
- Ⅵ 第三の危機……………三五〇
- Ⅶ 結論……………三六六

解 説

ロジェ・マルタン・デュ・ガール

先年死んだ孤高狷介なフランスの評論家アンドレ・シュアレスは、かつて『現代フランス評論家選集』にその論文が収録された折、編集者からその閨歴を求められたのにたいし「読者は余の作品だけを読めば足る。彼らには、断じて余の閨歴を知るの権利なし」と、わずか二三行の言葉をもって答えていました。いかにもシュアレス至極の言葉と、面白く思ったことを覚えています。

読者との絶縁の点でシュアレスとくらべ得るものは、あるいはこの『ジャン・バロワ』の作家ロジェ・マルタン・デュ・ガールではないかと思えます。さらにマルタン・デュ・ガールの場合、「文壇」との絶縁を加えていいかと思えます。一九三七年、『チボー家の人々』第七部『一九一四年夏』にたいしてノール賞が授けられたとき、フランスの新聞・雑誌は、その作者の閨歴、写真を掲載しようとして、大いに困惑されたことが伝えられています。いわゆる文壇人との交際を殊更きらい、交遊の範囲も、わずかにジード、シュランベルジェ、コポーといった連中だけにかぎり、ほとんどいつもパリを避けてテルトルに住んでいるマルタン・デュ・ガールは、けだし、社交好きな

フランス文壇にあつて、もつとも文壇人らしからぬものの人ということができましょう。さいわい、最近、ブレイヤード叢書の一部として彼の全集が上木されるにあたり、そこにはきわめて周到な年譜と、何と思つてか彼自身筆をとつて書いた極めて興味ふかい『思ひ出』とが収載されております。これによつて、彼の家系、経歴はもとより、文学的活動の全般にわたつて、残る限なく見わたされることになったわけであります。

そもそも作家の製作態度の点からいって、そこには二種類のものがあるように思われます。その第一のものは、一作ごとに新しい冒険をこころみ、その才能の趨くにまかせて、読者をして応接にいとまなきほどの発露を見せるものであります。第二のものは、ちやうど豊かな土壌を得た一本の木が、来る年ごとに年輪をかさね、ついには鬱蒼たる大樹となるといったように、当初からして一つの方向を持ち、幾多試作ともいふべき作品を経て、ついには鬱然たる大作にいたるところのものであります。この第二の例を現代フランス文学に求めた場合、とりわけ顕著なものとして『善意の人々』の作者ジュール・ロマン、それにわがマルタン・デュ・ガールをあげることができましよう。

年譜によつて御覧のように、彼こそは若き日の作品『生成』に出発し、かたわら彼の好んでいた劇作に手を染めながら、劇作の手法を多分にとり入れた『ジャン・バロワ』を経過し、ついに洋々たる大作『チボー家の人々』を完成するにいたつたものと言ふことができます。そして、これら作品をつらぬくもの、とりまなおさず、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての、若き人々の危機の問題であります。『生成』において、一人の文学

を志す青年と、その青年をかこむ教人の友人たちを主人公にえらび、少年客気多く、ついに不毛と幻滅に暮れとする、おそろくは当時二十七歳だった作者自身の感懷を話した、言わば主観的な作品を物した彼は、『ジャン・パロワ』にいたって、その作品に客観性をあたえ、一八九四年フランス全土を震撼させたドレフュス事件と、科学主義の攻勢による信仰動搖の様相とを背景とし、国家か正義か、科学か宗教かの対決を前にしての若き人々の苦悩を取りあつかい、さらに『チボー家の人々』にいたるや、一九一四年第一次世界大戦を背景とし、新らしき時代に処するにあたって、保守か革命かの兩陣營に立ちわかれた二人の兄弟、さらにこの兄弟によって代表される時代人の反省と苦悶とを描きだし、こうして彼の制作發展過程に、前後をつらぬく強靱な一線のあることをしめしてあります。

第一作『生成』がほとんど注目を引くことなくして終わったのに反し、アンドレ・モロワの記すところによれば『ジャン・パロワ』は、当時の読者層、まさにロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』に劣らざるほど揺り動かしたものだということでありま。

作者は、この作品を三部にわかち、その第一部において、一八七八年のころ、パリに近いビュイの町で、医師パロワを父とし、狂信的カトリック信者を母にもった少年ジャン・パロワが、母や神父から教えこまれたカトリシズムの信仰に疑問をもちはじめ、神への信仰を離れて無神論の科学者の道をたどる過程を描いてあります。一八七八年と言へば、まさにルナンが『キリスト教の起源』を書き、テュヌが『近代フランス起源論』を書いて、唯物思想による科学主義を高唱し、フランスにおけるカ

トリック信仰が危機にさらされた年にあたっております。つまり第一部は、宗教か科学かの問題に直面し、ついに信仰をすてまらしたこの時代の青年の典型像を描き出したものと言えるでしょう。

第二部では、成人するにつれて自由思想家となったパロワは、これまた狂信的なカトリック信者である妻と別居し、パリに出て進歩主義者の同志たちと雑誌『種蒔く人』を発行し、おりからドレフュス事件が起るに及んで、堂々の筆陣を張ってその裁判の非違を鳴らし、押しもおされもせぬドレフュス派としての姿を見せております。

さて、ドレフュス事件とはなんであるか。

それは一八九四年の秋、アルザス生れのユダヤ系の参謀本部附砲兵大尉アルフレッド・ドレフュスなるものが、国防に関する機密書類をドイツに売りわたそうとしたという嫌疑で逮捕されたことに端を発しております。当時、ユダヤ人排斥運動はとりわけフランス国内でさかんだったため、ユダヤ系の一将校が祖國をドイツに売ろうとしたということは、フランス朝野に異常な衝撃をあたえたことは申すまでもありません。ドレフュス自身、あくまでも身の潔白をさげびつづけていたにかかわらず、彼はその年の末、軍法会議によって叛逆罪を犯したものととして終身流刑を申しわたされ、南米ギアナ植民地の一孤島、悪魔島に監禁されることになったのでした。ところが、後にいたって、彼の判決が、彼自身にも、弁護士たちにもしめされなかった一つの秘密文書にもとづいてなされたものであることが明らかとなるに及んで、人道と正義の名により、ドレフュス再審に附すべしとの声は勃然として湧き起りました。とりわけ

『ナナ』の作者エミール・ゾラが決然立って一八九八年一月十三日、オーロール紙第一面に、「余は弾劾す」の公開状を発表し、ドレフュス判決がいか不正に行われたかを指摘したのは、ドレフュス事件の前後に通じ、きわめて花やかな一挿話とされております。

それにつづいて参謀本部情報部長アンリー大佐の自殺によって、ドレフュスの書いたものとされていた文書が、じつは彼の偽筆になるものであることが明らかにされるに及んで、ドレフュス再審査の運動はますます熾烈の度を加えました。そして、一八九八年、破毀院は、一八九四年の軍法會議の判決を破毀し、ドレフュスをあらためて軍法會議に附するむねの判決をくだし、その結果、ドレフュスは、巡洋艦スファックス号に載せられて悪魔島からつれもどされ、レンヌで開かれた軍法會議に附せられることになりました。判決の結果は、軍法會議の判士たちが、証人として出廷した將軍たちの威圧をうけ、一方國家の名譽をきずつけないためというおもんばかりもあって、ドレフュスは原審どおり有罪、但し情狀酌量により十ヵ月の禁錮に処すということに落ちつきました。ドレフュスはこの判決の後、その無罪であることが明白である事実にかんがみ、この事件がこの後もなお世論の沸騰を引きおこすおそれあることを考えた政府によって特赦、釈放の申し渡しをうけました。そしてさらに一九〇六年にいたりますと、社会黨の領袖ジャン・ジョーレスたちのはげしい抗議と斡旋の結果、破毀院からあらためて無罪の判決をうけ、軍籍に復帰することをゆるぎました。

それはともかくとして、たまたまドレフュス事件によって火花を發した保守派と進歩派、國家主義と合理主義の対立は、そ

の後も折あるごとに表面にあらわれ、それは遠く今日にまでもその尾を引いているものと言えましょう。ドレフュス事件のほとぼりきめぬころとは言いながら、ゾラの死後、その遺灰がパンテオンにおさめられることになったとき、その盛儀をめぐる左右両派の學生たちが、あるいは「ゾラ萬歳！」ときき、あるいは「ゾラをやっつけろ！」とききんでパンテオンを中心に流血騒ぎを演じたこともそのひとつのあらわれであり、まさにドレフュス事件こそは、單に政治上における過去の勢力と未來の勢力との激突だったにとどまらず、この事件への回想により、その折々の良心の所在につき、たえず反省と吟味との機会をあたられているものと言えましょう。

さて第三部においては、かつてはドレフュス派の闘士、戰闘的な唯物論者として活潑な動きを見せていたパロワが、年老い、肉体が衰えるにつれて、その知性にも衰えが見えはじめ、かつての唯物思想を離脱してカトリシズムに復帰し、司祭の前で告解して死んで行く過程が描かれております。かつては不屈果敢な闘士として科学主義・合理主義を身をもって行なっていたかの感のあるパロワを訪れたこの終焉、それは、闘い疲れて崩れ落ちる知識人の悲劇を語るものとして、作者必ずしもこれを鞭打っているものではなく、これはこれとして、一種壯麗な落日を見るの感なきを得ません。

『ジャン・パロワ』一巻、これを手にする読者諸君は、おそらく全篇ごとく対話形式による構成であることにいさかかともいわれるのであります。こうしたまどいについてはあえて読者諸君を俟つまでもなく、この作品の出版に際して興味ある経緯のあったことが、『思ひ出』のなかに語られておりま

す。すなわち、マルタン・デュ・ガールは、かつての契約にもとづき、これをグ拉萨社から出版のつもりで原稿を送り届けたところ、これを手にしたグ拉萨から「これは小説ではありません。これは調査資料であります。はっきり申しあげさせていただきますと、まさに失敗の御作です。読者能く、百パーシマで読むであろうか、きわめて疑問といたしております。」と、体よく出版断念をすすめられたことを記しております。ところでこの作品において採られた対話形式、これは作者自身も語っておりますように、彼が文学志望当初からもちつづけていた劇作への関心に出たものでもありましようが、一ほう、この作品自体の構成の点からも考え、また、そこに見られる息づまるばかりのみごとな緊迫感の点から言って、まさにこうした対話形式によってこそ、の感なきを得ません。

『ジャン・パロワ』において取り扱われた世界、それはまさに十九世紀末のフランスであります。しかし、ドレフュス事件といい、また科学と宗教の対決といい、これははたして、かつての世の、かつての出来ごととのみ言いきることができるでしょうか。わたくしは、さきに、ドレフュス事件によって火花を発したところのものが、じつは今なおフランスにおいて尾を引いていると申しました。だが形こそ異なれ、おなじような不正と歪曲が、おなじような暴虐が、わが国においても見られつつありとは言えますまいか。科学の名において、あまりにも見えるもののみを怖れる精神が、あまりにも「見えざるもの」を畏れるの精神が、われらのあいだに跳梁しつつありとは言えますまいか。あるいは逆に、信仰の名において、さらには近くデモ

クラシーの美名の下に、あまりにも多くの専断と恣意とが、跋扈しつつありとは言えますまいか。およそ一世紀をさかのぼってのフランスが、じつは現在の日本であることを思うとき、現代の、さらには来るべき時代の青年たちが、『ジャン・パロワ』一卷を通じて享けるところのもの、けだし僅少ならざることを信じております。

ポール・ブルジェ

ポール・ブルジェは、一八五二年九月二日、フランス西北部、英仏海峡に近いソナム県アミアン市に生まれました。父は南仏アルデーシュ県サバスの生れ、母はローレーヌ州の生れであります。その生家は、かつてアルザス州にあり遠くさかのぼればドイツの血を引いていると言われております。

こうした父系と母系の交錯から、彼自身の裡にひそむゲルマンの血による哲学的・詩人的態度、並びに明快純粋なラテンの伝統による分析家的態度というものも考えられるのではありますまいか。

アミアンで生れたブルジェは、高等中学校で数学の教師だった父の転任にともない、その後ストラスブルに移りましたが、つづいて父がクレルモン・フェランの理科大学教授となるにおよんで、故郷に近いオーヴェルニュの土の香に親しむことになりました。彼の学校生活は、このクレルモンに住んだ頃からはじまりますが、当時父が彼にあたえた科学的教育こそは、

とりもなおさず後年のブルジェを作りあげたところのものと
言うべきで、『弟子』に描き出された宇宙生成の物語、植物の
分布、昆虫の分類などの詳細な解説など、つまりはブルジェ
自身の少年の日の思い出にはかならないと言えましょう。ブ
ルジェ自身の語るところによりまして、彼は、当時父から見
せてもらった昆虫標本に興味をそそられ、たとい漠然とはあ
ったにしても、オーヴェルニュ一帯の昆虫について、何かま
めあげてみたいといった気持を抱いたということです。おなじ
く『弟子』の中で語られている、主人公がシェイクスピアの作
品を耽読するくだりのごときも、また、当時にあつてのブル
ジェ自身を語っているものと言えましょう。こうして、クレル
モンに住んでいたあいだ、この異常な天稟にめぐまれた少年の
頭には、父から教えたこまれた科学的訓練と、一ほう、シェイク
スピアによる詩人的想像力とが、互いにめづらしいほどの均衡
を保って植えつけられていったにちがいないことが考えられま
す。その後、父がパリのサント・バルブ高等中学の校長となつ
て転任するに及び、ブルジェ自身もこの中学に転校しまし
た。時あたかも一八七〇年、普仏戦争の勃発にあたつて、彼は
暗澹たる幾月かを経験することになりました。『弟子』の巻頭
にある『ある青年に寄す』と題した一文の中に記されたよう
に、彼は、「パリのうえにとどろきわたる砲声を耳にしなが
ら、最初の詩、最初の散文を書き散らし」、一ほう、年長者たち
が次つぎ戦場に出かけるのを見送りながら、「今は半ば空になつ
た教室の隅、祖国再興の重任が自分たちの双肩に重くのしかか
るのを感じ」ていたのです。じつにこの普仏戦争のながい経
験こそ、彼をして後に『弟子』を書き上げるに到らしめた重大

な原因をなすものであり、すなわち彼は、「外部における勝利
と敗北とは、とりもなおさず内部における長所と欠陥との現
れにすぎない」と考え、十九世紀初頭におけるドイツの復興は、
要するに一つの偉大な精神的所産であり、一八七〇年のフラン
スはまさに、大きな傷に身も心も打ち砕かれたものであると考
え、そして、それを回復させる任務こそは、まさに来るべき若
き人々の肩にかかっていると考えたことから、文筆にたずさわ
る者、よろしく十二分の責任をもつて筆をとるべきことを警告
しているのであります。

『弟子』は、評論家ヴィクトル・ジローの言葉を借りて申せ
ば、まさに前世紀末のフランスの倫理史上に一大時期を画した
小説であり、これを中心としてアナートル・フランスとブリュ
ンティエールとのあいだにはげしい論争が引き起され、当時の
青年によつて争つて読まれ、激論がかわされ、止まることを知
らぬ論議がくりかえされたところのものであります。

現代フランスのスペンサーと呼ばれている老哲学者アドリア
ン・シクストは、その専門外のことについては何ひとつ興味を
持たず、かつて新聞さえも手にしたことがないと言われるほど
に非社会的な学究でした。ところが、彼が書斎に閉じこもつて
書き上げた一篇の『情欲論』は、これを読んで啓示を受けたと
称し、その後パリに二三回彼も訪ね、しかもシクストのほうで
は忘れていても、みづから彼の『弟子』をもつて任じている天
才的な青年ロベール・グレルーの上に種をおろして、そこに異
常な展開をしめすことになつたのです。

すなわち、グレルーはあくまでも科学の絶対神聖を信じ、あ
たかも一般の自然科学において実験が許されるごとく、恋愛の

研究についても当然実験が許されるはずであると考えたことから、家庭教師として住み込んだ侯爵家の令嬢シャルロットを実験の相手に、これを誘惑したというわけでした。ところが、青年の日記によってすべてを知った令嬢の自殺は、青年をして殺人罪の嫌疑に問わせました。そして、青年の獄中からの告白とともに、その実験記録を届けられたシクストは、ここにはじめて、そうした悲劇の原因が自分にあったこと、科学は絶対神聖なりやの大きな疑惑に直面させられたというわけでした。

シクストは、当時フランス思想界に偉大な勢力をもっていたテーヌをモデルとしたのですが、ブルジュエは、社会人としての立場、また、フランス国民としての立場に立つての詰問を試みるとともに、今やルナン、テーヌなどの説を承けて危険な学問上のディレッタンティズムに陥ろうとしつつあった祖国の青年たちに向って、一大警告を発したものと言うわけであります。学者や思想家にとって、その書齋裡の研究は自由であつても、いったんその研究をひっさげて世に問わんとするとき、それによる影響について、はたして責任なきものなるや？ これすなわち、この作品によって、ブルジュエが世に問わんとしたところのものであります。

『弟子』に描かれたアドリアン・シクストが、テーヌをモデルにしたことは前も記したとおりですが、『弟子』を手にしたテーヌが、これについて作者に送った長文の書簡には、きわめて興味ふかいものがあります。テーヌは、表面あくまでも冷静に、シクストの態度についての批判を述べておりますが、その裏に、さすがに彼自身の心の動揺を隠しませんでした。すなわち、書簡の末尾に、彼は次のように記しております。「君よ、

わたしの抗弁をゆるせ。これは、君の作品に、わたしの心の内奥を強く撃つものがあったがためなのだ……わたしは、最後に一言述べよう。すなわち、今や好尚は変転し、わたしは属しているジュネレーションにも、ついに最後の時が来たということなのだ。わたしは今、サヴォワの古巣に引込もうと思っている。おそらくは君の探られた路——すなわち「不可知」を求め、「かなたなるもの」を求め、「実体」を求めんとする君の思想は、今後神秘の港、キリスト教の一形式の方面に君を導くことになる。もし君にして、そこに心の安心と健康とを見出されるということだったら、わたしは喜んで今とかわらざる友情をもつて、そこなる君に挨拶を送らう……」

まさしくこの文中にあらわれたように、『弟子』一卷こそは、テーヌの時代を送るところのものであり、一ほうブルジュエにとっては、彼の新しい時代への出発をしめたものというべきでした。すなわち、心理分析作家たるブルジュエの場合、彼はその初期作品においてこころみていた自我を主体とした分析の実験と訣別し、あらためて、時代と社会にたいする重要な実験への第一歩を踏みだすことになったのでした。

すなわち『弟子』一卷を転機として、それまではただ単に微妙な心理解剖小説作家たるにとどまっていたブルジュエには、ゆるぎない倫理学者としての態度、同時に、きびしい人生と社会とにたいする批判者としての態度が加わり、それは堅実な宗教意識によってつらぬかれて、ここに後期の大作『離婚』『正午の悪魔』、『死の意義』など、さらには、デモクラシーにたいする検討をこころみた『舍宮』などが生みだされたというわけであります。

『ジャン・パロワ』と『弟子』と、作者の立場から言つてあるいは異質とも思われる二作をこの一卷にあつめた理由については、読者諸君のおのから会得されるものと信じております。この一卷こそは、わたくしとして、いつも諸君を、とりわけ若き諸君を念頭に思い浮べて、まさに諸君のためにこそその意味をもつて翻訳したところのものと言えましょう。

なお『ジャン・パロワ』については、かつて青柳瑞穂君の手によつて翻訳がこころみられております。すでに翻訳のあるものは訳さないことをもつて方針としているわたくしですが、この全集のため、のつびきならぬ事情から新訳を必要とされ、あらかじめ青柳君に諒承をもとめましたところ、快諾の返事とともに、必要とあらば自由に旧訳を利用することをゆるされました。もしこの新訳に見るべきものがあつたら、同君に負うところ少なからざることを思い、ここに心からの感謝をささげさせていただきます。

一九五六年十二月六日

山内義雄

Jean Barois

ジ
ヤ
ン
・
バ
ロ
ワ

山 マル
内 タン
義 デュ・
雄 ガール
訳

マルセル・エペール氏に

貴下の宗教的感情は、おそらくこの作品のもっているある種の傾向によって傷けられるものと思われまふ。それは小生も存じております。それだけに、この書を貴下に捧げることをおゆるし下さったことについて感謝いたします。

この書の冒頭に貴下のお名前をかけることは、二十年このかた小生が貴下にささげつづけている心からなる敬愛をしめすのみにとどまりません。小生は、それにより貴下の御思想の気高さと、貴下の作品に見られる豊かな批評的御蘊蓄とを知悉するすべての人々から、より深い注意と、さらには貴下の見事なる抑損の御生活に寄せられる敬仰の余榮とでもいったようなものが、この小生にも齎らさるべきことを信じてうたがわれないものであります。

一九一三年十月

R・M・G・